

砺波カイニヨ倶楽部会報

第十三号

平成十二年一月発行 発行所 砺波カイニヨ倶楽部 代表幹事 柏樹直樹
事務局 富山県砺波市表町七-二十五 TEL 0763/33/6588

天野一男建築工房内

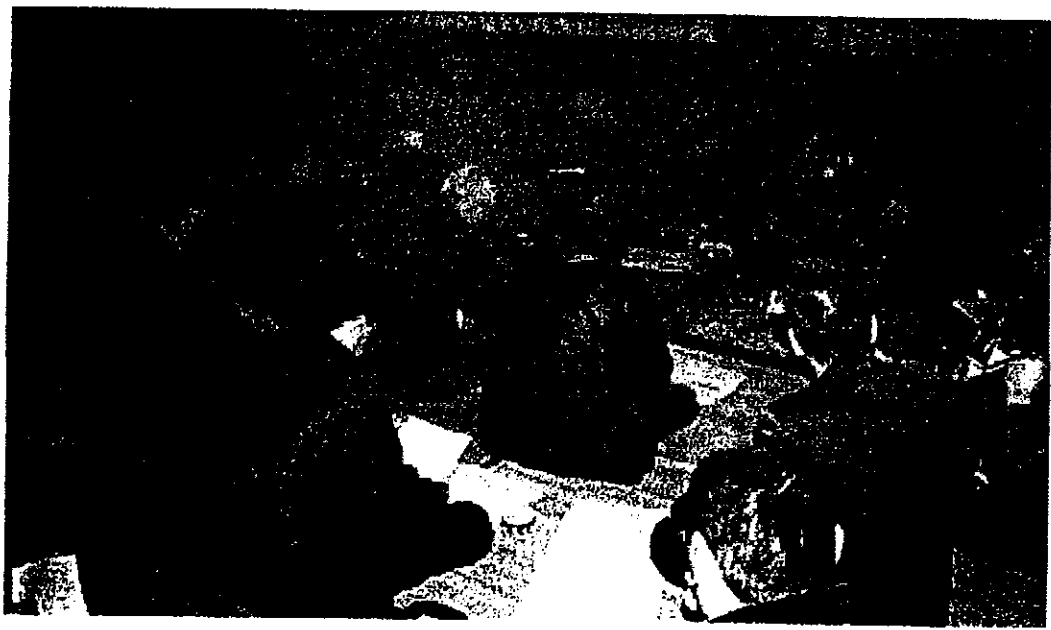


◇「田んぼ博物館」勉強会二十六名参加

平成十一年十二月十二日(日)午後 チューリップ公園内 旧中島家にて、富山県が検討中の「田園空間博物館構想」について、勉強会を開催した。県の事務局の方に説明いただき学ぶこの会に二十六名が参加した。イロリを囲み、薪

で暖をとった。
柏樹代表幹事が司会進行をつとめ、はじめに、県庁の鈴木孝文氏から構想のポイントや取り組もうとしている計画について説明をいただいた後、シンポジウムの計画(裏面参照)や砺波市の考えている事についても各関係者から報告された。その後、参加した会員から疑問や意見が多数出された。

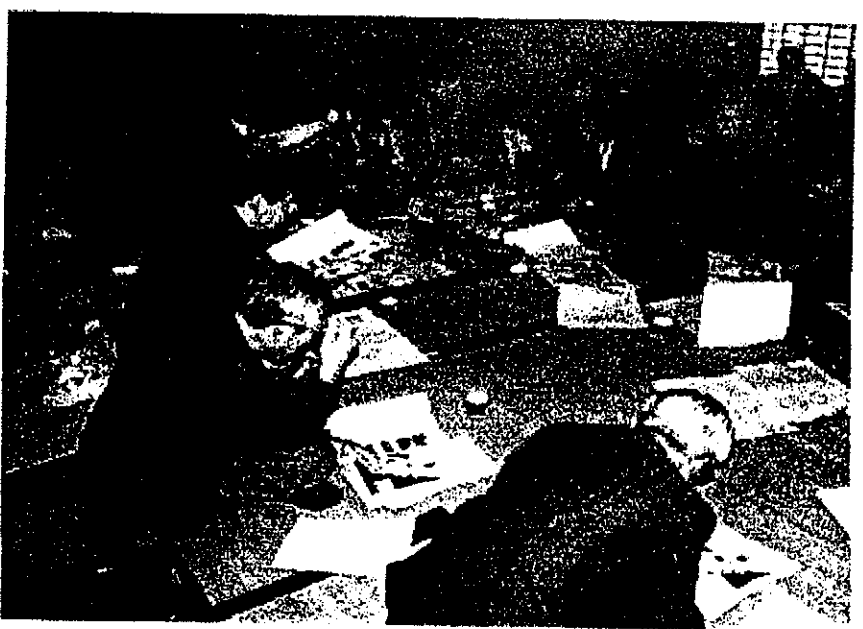
- 主な意見は次のとおり
- 高木の枝打ち等の管理が一番深刻。
- 家を建て替えると木がなくなる。その実態にどういう歯止めをかけるかだ。ソフト面が大切だ。
- 新工場には、緑化の条件も指導されているはずだがそれが全く不十分。
- 家が古く若い人には馴染んでもらえない。若い人の屋敷林への理解が重要。
- 屋敷林を残せというなら県全体で助成



イロリを囲んでの話し合い

- すると良い。見る人は楽しみ、入居者は維持と管理で汗をかき人では話にならない。
- 保全するなら全体の合意がなるまで話し合いをしてほしい。
- 資源利用のためにイロリをつくるなら、そうした面での助成等も検討したら良い。
- 外部から規制されるとすっきりしない。
- 次代の人が管理できるといえないのでそれを受け入れる対応が必要だ。
- 日本文化の「カイニヨ」といっても若い人は掃除で疲れるから伐れという。
- 屋敷林(個人)と散居村(面)のいずれを残そうというのがねらいなのか。
- また、開発との関係をどうしていくのか。それに対して行政は何をやるのか。
- 新しい住宅地に木のスペースがない。その点の緑化の指導が大切だ。
- 小学校や公共建物が裸になっている。その緑化から考える。
- 大人の人数だけ車がある。宅地の中に車のスペースが広く必要になる。緑のスペースを入れた宅地計画が必要。
- 若い人の教育を基本的に考え直せ
- 緑化方法についてもその内容を具体的に指導することが必要だ。
- 新築申請と同時に屋敷林を残させる指導を個人と話し合って具体化することも大切だ。
- どの家もカイニヨをゼロにしないことが大事だ。
- こうした意見に、県の担当者として考えている点の説明があった。

- その主な点として
- スギ資源を再利用する道を大いに考えたい。
- 屋敷林を残そうという地域の雰囲気や大事、おおいに話し合うことだ。
- オーナー制度は個人のことなのでそれぞれが自らのこととし屋敷林に近づいてもらうようにしたい。
- 行政のやるべき事を明確にしていく。
- 全国での進んだ平地での林保全の経験を参考にしたい。
- 各町村でいろいろなレベルの話し合いをしながら住民交流をはかる必要がある。
- また、率直な声についておおいに参考にし、これからの計画立案に活かすことを担当者からまとめとして表明され終わった。



イロリで暖をとりけむりが立ち込めるなかで

◇県庁の鈴木氏からの報告の概要。
参加者には計画の資料が配られた。

①砺波広域圏をエリアに考えたい。散居の水、道、その情報源を考える。

②田園空間構想は日本の田園を中心とした現風景の保全にある。

③あるものをそのまま残し活かして行く、

ソフトの活動は地元住民が、国はそのためのハード面の支持をする。

④住民内発型の計画である。

⑤平成十五年までの事業として考えているが事業の内容からは、その後も継続させるものだ。

県からは鈴木孝文氏、白江幸治氏、中松敬之氏、千田重雄氏、また、砺波市からは五島親秀氏が出席された。

◇樹木の枝葉を無公害のリサイクル燃料に……

天野事務局長より

ヨーロッパでは、現在、次の世代に資源と自然との共生の大切さを教えるため、都市公園に樹木を植え家族や学校で森へ出かけ、人間を含め自然の生態を基本から教えています。当然、生命の尊さも受け継がれています。

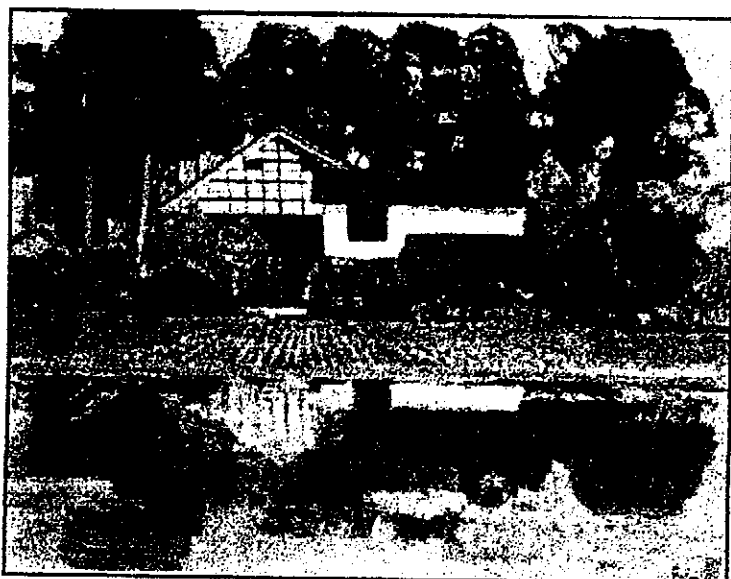
人々が資源と自然の大切さを生活の中で体験し、後世へ引き継いでいます。また、隣国の韓国も同様です。

ところが、近年、日本国内では伝統文化は継承されず、先人の知恵と汗と苦勞の跡をブルトーザーで開発する様な方法がとられています。それにもまして、若者の傷害事件やいじめ等で生命に関する事件が増加しています。これらの理由は、高度経済成長のもと物資欲だけ満たすため、自然との共生を

嫌い自然環境を破壊し人工的環境のだけで生活したため、生き物との生死の出会い無く、人が成長した結果と思います。

今後、環境と省エネルギー・他への配慮はもちろん、先人の知恵の伝承と共に身近な生活の場を自然と共生（生き物との生死の出会いが）できる生活空間にする事が将来の日本人に最も必要な事ではないでしょうか。

そこで、邪魔者扱いされる樹木の枝葉などを無公害のリサイクル燃料として固形化することを考え、少しでも自然と共生する屋敷林を残し、その必要性を次世代に伝えていく手助けになるのではないかと思います。



第31回日展入選作品の絵はがき（年賀状）

会員の氷見長徳さんから年賀状をいただきました。
散居村をテーマに十年余り描かれ、近々個展も開かれるそうです。

お詫びと訂正

前号（第十二号）の会報で裏面の新聞社名に誤りがありました。
見だし部分”砺波散居村を「博物館」に”の記事は、北日本新聞の記事よりです。
訂正してお詫びいたします。

となみ野田園空間シンポジウム

……開催のお知らせ……

富山県の主催で、屋敷林に囲まれた砺波平野の散居村の保全整備という観点から、田園シンポジウムが地元市町村と共催で開催されます。どなたでも参加できます。

■シンポジウムの概要（2会場で開催）

◇テーマ 「美しいとなみ野田園空間の創造をめざして」

◇開催地 砺波市：1月23日（日）

チューリップ四季彩館ホール

城端町：2月13日（日）

南砺農業会館大ホール

◇開催時間 両会場とも午後1時30分～4時30分の予定

◇開催内容 寸劇または落語

（一方の会場では寸劇を、他方の会場では落語を実演）
散居村の保全のための問題を劇や笑いを通して提起します。

ディベート（両会場とも）

県内テレビ局アナウンサーと地元住民代表が、散居村の抱える問題点などについて、賛成派と反対派に分かれて討論します。

◇主催

富山県、砺波広域圏市町村、
食料・環境・ふるさとを考える富山県地球人会議